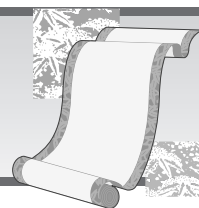


軍記物語の女性たち (14)

建礼門院右京大夫の生涯 —『平家物語』より—

岡崎 嘉彦



建礼門院右京大夫は保元二（1157）年、平安時代の末期に能書の家である世尊寺家に生まれた。本名は伊子。父は、書道家として名を馳せた藤原伊行。母は伶人と呼ばれる楽師大神基政の娘で、で、笛や和歌の名手として知られた夕霧。そうした家庭のもと、幼い頃の右京大夫は書や箏・和歌を学んだ。

承安三（1173）年、右京大夫が十七歳の時、平清盛の娘で高倉天皇の中宮である建礼門院に仕える。そして、宮廷で芸術上の才人として名高い藤原隆信や平清盛の孫で重盛の次男資盛という二人の男性と出会う。彼らの間で心が揺れる右京大夫だったが、やがて資盛との愛の道を歩み始めるようになり、お互いの愛を实らせていく。その後、母の看病のため宮中から退出した右京大夫であったが、資盛との関係は絶えず続いていき平穏で幸せな日々を送ることになる。しかし、清盛の死後、平家は衰退の一途を辿っていく。そして、寿永二（1183）年、平家が都落ちをし、資盛も愛する右京大夫に別れを告げて西国へと旅立つ。寿永四（1185）年、資盛は壇ノ浦の戦いの果て入水する。資盛の死を聞いた右京大夫は深い哀しみに暮れる事になる。やがて、彼女はその絶望の日々から立ち直り、その後は一命を取り留めた建礼門院がいる寂光院を訪れ、また資盛の供養に努めた。

建久六（1195）年には後鳥羽天皇の宮廷に再出仕し七条院などに仕え、歌人として名高い藤原定家の勧めにより、資盛への愛情や追憶を綴った日記風歌集『建礼門院右京大夫集』を記す。それは、彼女が辿った資盛との愛の記憶をいつまでも想い続けていたいという彼女の願いだったのかも知れない。

建礼門院右京大夫は終生平家一門と関わり、平家の盛衰を見続けた女性である。彼女の人生は建礼門院徳子に右京大夫として出仕したことからこのように呼ばれ、知性を尊ぶ隆信や武人としての凛々しい資盛といった魅力的な男性と宮廷での恋の日々が始まった。年下の貴公子資盛との恋は身分も年齢も釣り合わないもので、

彼女の恋はひたすら忍ぶ恋であった。そして、心に負い目を感じる右京大夫に盛んに言い寄る隆信という男性が現れる。資盛への愛を貫こうとする右京大夫だったが、隆信の強い求愛は彼女の心を捉え、次第に心惹かれるようになっていく。そして、二人の恋の間で苦悩の日々を過ごすこととなる。だが、隆信にとって右京大夫への恋情は一時的なものであったのか、やがて二人の関係は冷え込むようになる。深く傷ついた右京大夫を資盛は大きな包容力で優しく癒し、お互いの心には再び愛が芽生え始める。そして、彼女と資盛はようやく幸せな愛の日々を手に入れる。

だが、その幸せもつかの間、愛する資盛と永遠の別れが訪れる。最愛の人を失ったことでやりきれない寂しさと哀しみにうち拉がれる右京大夫。もはや、彼女にとって資盛の存在はかけがえのないものになっていたのだ。生きる目的を失ったかに思えた右京大夫だが、彼女はそうした哀しみを胸に秘め、再び華やかな宮中の世界へと戻っていく。そこには、彼女自身の強い決意があったのかも知れない。

右京大夫は『建礼門院右京大夫集』の中で宮廷での出来事や二人の恋人、愛する人を失った哀しみを歌っている。

我が身もし 春まであらば たづね見む
花もその世の ことな忘れそ

彼女の人生は資盛の広い心によって救われ、それは真実の愛に変わった。このような彼女の才気溢れる恋の物語は多くの人々の心を虜にしてしまう、とても魅力的なものであったように思われる。

■主な参考文献、そして、今回おすすめする本

- 『建礼門院右京大夫集：付平家公達草紙』久松潜一、久保田淳 校注 岩波書店（岩波文庫）1978.3 911.14-Ken

おかざき よしひこ（司書・係・情報サービス課）